
サイドストーリーズ ~それぞれの道~

獅施額羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サイドストーリーズ ～それぞれの道～

【Nコード】

N7774I

【作者名】

獅施額羅

【あらすじ】

あなたには、今まで過ごしてきた人生がある。それは、私にも、道行く人にも。それは、作中の人物でも同じなのです。村人Cにもラスボスにも、過去や、今の視点がある。これは、主にサブキャラ達の視点で描く、それぞれの人生の物語です（主に……というところは重要です。あくまでも、主に……）。主人公だけが、主人公じゃない！

なお本編を知らない方は……まあ、読んでやってください。短編集

で、一応知らずとも読めるようになっていたとは思いますが……。あくまでも、思っただけですけど……。

注意1：普段も気まぐれ更新ですが、これはもっと気まぐれ更新です。

注意2：一作品だけではなく、私の作品全ての外伝を、ここで書かせてもらいます（しばらくは『破天こーメイツ』のみですが）。

破天こーメイツ外伝1 ある日の職員会議（前書き）

力也視点でお送りする、破天高校の職員会議の様子。笑いはあまりありません。

破天こーメイツ外伝1 ある日の職員会議

俺の名前は神崎力也。通称「りつきー」だ。俺の姿を見た奴は、鍛え上げられた筋肉と、坊主頭が印象に残るだろう。三十二歳、独身。結婚などするつもりはねえ！ なぜなら……。

「お兄ちゃん、会議中だよ。ポーっとしないで」

そう！ 今俺の脇腹を突いてきた、世界三大美女を足して七乗してもなお、及ばぬ美しさと、ハムスターをデフォルメしてもなお、足元にも及ばない可愛さを併せ持った、最高の妹「唯華」を、この命を賭けて見守っていくと、それはもうご先祖様やら父やら母やら、俺の心やらに誓いを立てた訳だからで、他の女なんぞに興味はねえ！ と、いうわけだ。

で、今は職員会議中だ。職員ではない唯華がここに居るのは、俺が頼りないからだそうだ。

「まあ俺って実はしつかりしてるけど、唯華を見守るために、あえて！ 頼りない振りをして……」

「おい力也！ うっせーぞ！」

ぬう……。声に出していたか。荒の野郎、昔よりも性格とか言葉遣いが悪くなりやがったな。昔はあんなに……。まあ、それはまた別のお話。

「で、なんか話し合うことねーか？」

職員の半分以上が、眠たそうな顔をして欠伸をしている。携帯をいじってる奴もいれば、携帯ゲーム機を堂々やっている奴もいる。これが破天高校クオリティ！ 教師がこれだ、生徒がああなる訳だ。それでも八年間、問題なく学校運営がされてきたし、卒業生たちは一人残らず立派な進路を歩んでいる（歴代のトップバカたちも含めて）。流石といつかなんといつか。荒のリーダー資質は凄いな、相変わらず。

「そーいえばさ、力也のクラスのアイツら、佐伯だっけ？ アイツ

らのラブラブっぷりを表現しようとして挫折してなかった？」

眼鏡の女職員が、唐突に切り出す。

アイツも口が悪くなったな。俺達、破天高校教員は、学生時代からの友人同士で構成されている。理由・経緯は……まあ、それもまた別のお話。

「そんなこともあったなあ……。シヨーキ、どう？　なんかない？」

荒が話を振るのは、荒のすぐそばで立っている佐竹勝輝。アイツを含めた三人くらいだな。学生の頃から変わっていないのは。俺に至っては、ラブレターなるものが流行っていた時に、それはもう下駄箱から溢れ返るほどに貰っていたというほどのイケメンだったのに、今じゃ生徒からはゴリラ扱いだからな。

「……荒様。それは、決めるべきことなのでしょうか？」

「『様』は要らねえよ。まあ、暇だし……さ」

少し考えた後、勝輝は口を開いた。

「『佐伯』で良いんじゃないですか？　彼等の様なものは他には居ないでしょうから」

「……それもそうだな。じゃ、決定……と。他になんかないか？」

荒が再び聞くと、はい、と手を挙げる生徒よりも子供っぽい女職員。

「カレーってインドが本場だよな。前から思ってたんだけど、インドには無いような福神漬がこの国で定番の組み合わせになったのって、なんで？」

なんとなく隣を見ると、唯華が「そういうえはなんでだろう」というように首を傾げている。

答えてやろう！　マイ・スイート・シスター唯華。

「それはだな……」

「別にどうでもいいんじゃない？」

俺が答えようとした途中で、荒が遮った。

「それもそうね」

話題を提供した本人と唯華も、納得した風に頷いた。そして俺の眼

には、キラリ光る水滴が湧き出た。

「そういえばさ。俺って甘いもの好きんだけど、甘過ぎるのは嫌なんだ。で、プリンのカラメルソースが邪魔だと思うんだけど、皆どう思う？」

荒が、思い出したように言った。

「それは好みの問題。俺は別に気にしたことねえよ」

携帯をカチカチいじりながら言う男の教師。

「くっそ、暇だなあ、オイ」

我が校は今日も平和なようだ。慌ただしくもある日々の中、楽しく笑い合っている。

「……そういえば、そろそろ夏休みの時期じゃないですか？」

「え？ マジだ！ 年間行事予定とか決めてねえから忘れてた！ みんな、いつからにする？」

「明日からで良いじゃん。どうせ休みも学校も変わんねえし」

「だな。んじゃ、今日は午前授業にしないか？ 荒」

「なんで？」

「いや、夏休み前日って、そんな感じじゃなかったか？」

「そうだな……じゃ、今日は午前授業にすつか」

そんな彼らの話し合いを、唯華はニコニコしながら見ている。

「みんな、変わらないね」

容姿や性格が変わっても、変わらない俺達の友情。それは、苦楽を共にしてきた、仲間とのカタチ。

「よっしゃ、明日からは生徒どもに体育館を使わせるから、今日は俺らでパーっとバスケットでもやろうぜ！ 力也、久々にワンオンワンの相手してやるよ！」

目の前に差し出される手を、少しの間見つめる。

「どした？ ボーっとしやがって。やるだろ？ バスケット」

「ケガは大丈夫かよ？」

「少しなら大丈夫だって」

いや、性格すらも変わっていないのかもしれない。俺が俺であり

続けるように、コイツらも……。

「今度こそ叩きのめしてやるぜ」

パンツと目の前の手を叩く。差し込む朝日に、高らかに鳴った音が吸い込まれる。

「盛り上がつてるところ申し訳ありませんが、まだ午前中ですので、これから授業ですよ？」

「そうだったー！」

勝輝の指摘に、大声を出して絶望する俺と荒。

変わらないノリ、変わらない会話。……俺達の学生生活は、まだ終わっていない。

果てしなく続く、人生の道。それをコイツらと共に、ずっと歩いて行けたら良いと、俺は心からそう思った。

破天こーメイツ外伝1 ある日の職員会議（後書き）

まじめに書きましたが、どうでしょうか？

破天こーメイツ外伝2も、同時に更新しておりますので、できれば読んでいただけるとありがたいです。

破天こーメイツ外伝2 幼き日々の思い出(前書き)

葵視点での、優との甘く、切なくなき、限りなく甘い日々。ことうい
うのが苦手な私は、悶え、赤面しながら書きました。うう、恥ずか
しい……。

破天こーメイツ外伝2 幼き日々の思い出

葵……それが、私に名づけられた名前。私が生まれた時から、ずっと共に過ごしてきた言葉。そして、大好きなあの人が笑顔で呼んでくれる、私の大好きな音。彼の口から湧き出る心地よいその音は、いつでも私の心に、温かさをくれる。私があの人を呼ぶ時も、あの人は私と同じように感じてくれてるのかな……？ うん、感じてくれてるはず。だって、私はあの人のが気持ちわかるから。どんなときも、ずっと二人で過ごしてきた私たちだから、通じ合う心。だからあの人は、私と同じ気持ちのはず。私が彼の名前を呼ぶ時に、心地よさを感じてくれてるはず。ねえ……そうでしょ？ 優……。

私は、口に手を当て、小さな欠伸をした。なんだか眠くなってきた。ちやつた。

私は布団に潜り込むと、すぐに眠りについた。

わたしはパチリと、目を覚ました。昨日は寝る前まで何をしていたんだっけ？ ダメ、思い出せない。わたしが今居るのは、白いフカフカな布団の中。その温かく、柔かい感覚が、先ほどまでの心地よい睡眠を与えてくれたのだろう。

そして、わたしの目の前には、綺麗な顔のおとこのこがいる。そのこは、今日を覚ましたと言わんばかりに、眠そうな顔をし、目をゴシゴシ擦っている。

「おはよう、あおいちゃん」

そのこは、わたしに向かって、ニッコリほほ笑みながら、わたしの名前を呼んだ。

「おはよう、ゆうくん」

だからわたしは、そのこに負けなくらいの笑顔で、そう答えた。

窓から差し込む朝日が、わたしたちを、明るく照らす。

「きょうからぼくたち、しょうがくせいだね」

「うん。あさごはんをキッチンとたべて、はやくがっこうにいこうね」
そう、わたしたちは今日、小学校の入学式に出るんだ。先生、友達。新しい出会いが、わたしたちを待っている。

「じゃ、したにおりて、おかあさんたちとごはんをたべようよ」

ゆうくんから差しだされる、白くて細い、綺麗な手。わたしはその手を握って、部屋から出て、ふたりで木の階段を下りる。

「おはよう、優、葵」

食卓には、パパとママ、ゆうくんのパパとママがいて、優しい声で、穏やかな表情で、朝の挨拶をしてくれた。

「おはようございます」

わたしたちは、キツチリ揃って、挨拶を返す。

「ははは、相変わらず仲が良いなあ、お前達は」

ゆうくんのパパが、ニコニコしながらわたしたちに言った。

「あたりまえだよ。ぼくたち、しょうらいけっこんするんだから」
ゆうくんのことばに、わたしはコクコクと頷いて、加勢する。

「はっはっは。だが、私達の方が、仲が良いぞ？ なんとって、もう結婚しているのだからなあ」

パパはママと、ゆうくんのパパはゆうくんのママと、手をつないで見せた。

「ぼくたちは、ホーリツのせいでもただけっこんできないだけ！ ぼくとあおいちゃんのほうが、なかよしだよ！」

プイ、と横を向いてゆうくんが言った。優しいゆうくんがむきになることなんて、ほとんど無いことだ。でも、わたしのことになると思地を張ってくれたりする。わたしはそれが、とてもうれしかった。

「もお、あんまり優と葵を苛めないの！」

ママがパパ達に、優しく言った。

「それもそうだな。このままじゃ、ふたりともせっかく早く起きたのに、入学式に遅れてしまうもんな」

「あら、もうこんな時間。ふたりとも、手を洗ってらっしゃい」
わたしたちが手を洗うと、六人での賑やかな食事が始まった。

朝ごはんを食べ終えたわたしとゆうくんは、手をつないで小学校に向かっていた。パパやママ達は、後から学校に来るつもりらしい。周りに見える親子達も、子どもの方は、わたしたちと同じ新入生なのだろう。緊張した面持ちがうかがえる。そんな中……。

「ゆうくん……。あのこ、なにしてるんだらう？」

わたしは、橋のうえで足をとめ、川の方を見てそう言った。そこには、ピカピカの正装のまま、川に手足を突っ込んでいる黒髪のおとこのこがいた。

「ちよつと、カイ！ アンタなにやってんの！ すぐに上がってらっしゃい！」

ゆうくとわたしが首を傾げていると、河原で大人の女の人の声がした。あのこのママかな？

「うっせえよ！ だまっておれにまかせとけ！」

大きな声で、おとこのこは答える。

「任せる？ 何をよ」

「あん？ さつきこのかわにおとしたの、とうさんにもらっただけじゃなキーホルダーだろ？ おれがみつけてやるっていつてんだよ！」
おとこのこのママは、ハアーーと、長いため息をついた。

「さつき落としたのは五円玉。そりゃ落としたまんまで何も問題が無い訳じゃないけどさ、環境面とかでは。ホラ、キーホルダーならここにあるでしょ？」

おとこのこのママのカバンに、キラリ光るキーホルダーがついていた。

「うおおおい！ いえよ！ さきにいえよおー！」

「言う前に飛び込んだのはアンタでしょ！」

「じゃあ、ちからずくでとめるよ！ おとなのちからでとめるよ！」
「無駄に運動神経の良いアンタが、私を振り切って迷わずダイブしたんでしようが！」

晴天の下、桜の咲き誇る河原に響くふたりの、どこか楽しそうな声。

「ちょっと……かわったこだね」

わたしは感想を口にした。

「でも、きつと……いいこだよね」

ゆうくんは、穏やかな表情で、その親子を見ていた。

「うん。あんなこと、ともだちになりたいね」

わたしたちは、再び学校を目指して歩き始めた。

少し緊張したけど、入学式も無事終わり、わたしたちは教室にきていた。ゆうくとわたしは、同じクラスだった。よかった……。ふたりで一緒に勉強ができる。

「おい、おまえ。なんだよ？ そのかみのいろ」

教室で、大きな体のおとこのこが、声を荒げていた。先生は……さつきプリントを取りに行つてから、戻つてきていない。

「おれのかみがなにいろだって、おまえにはカンケーないだろ？」

赤茶色っぽい髪のおとこのこは、興味がなさそうにそう答えた。

「ひとりめだとうとしやがって！ チョーシにのるなよな！」

大きな体のおとこのこは、赤茶色の髪のおとこのこを、ドン、と突き飛ばした。

「せんせいは……まだかえってきてない……。どうしよう？ ゆうくん」

わたしは不安な表情で、ゆうくんを見つめた。ゆうくんが、ケンカを止めようと、一歩前に足を踏み出した。その時……。

「おまえだってでかいカラダして、めだつてるだろうがぁー！」

黒髪の、服が染みだらけのおとこのこが、大きなおとこのこに向かつて体当たりをした。大きなおとこのこは、体勢を崩し、尻もちを着く。

「おい、へんなかみのやつ！ おまえとこのデブはてきだな？ そして、たったいまおれとこのデブもてきになった。てきのてきはミカタだ！ わがとも！ ともにあくのデブをたおそうではないか！ 黒髪のおとこのこは、胸を張って高らかに言う。

「へんなかみだとおー？ ふざけんな、このヤロー！」
赤茶の髪のが、黒髪のに掴みかかった。そこに……。

「あなたたち、なにしてるの！」
先生が教室に入ってきた。先生は、ふたりのおとこのこが取っ組みあっているのを見るなり、怒りだした。

「こつちにはじじょうがあるっつーのに……。これだからセンコウは……」

ガミガミと怒鳴られながら、赤茶の髪のが呟く。

「まったくだ。おまえ、おれときがあうな」

「どのながれで、おれとおまえのきがあうことになったんだよ？

おまえ、バカだろ……」

「どのながれって……。おなじことをかんがえたながれで……。ま

あ、おれはカイ。『やなぎかい』だ。これからよろしく。おまえは？」

「おれはソウタ。『やすそうた』だ」

自己紹介をして、ふたりが仲良くなったと思った先生は、怒るのをやめてふたりを見ていた。

入学式の翌日。わたしとゆうくんは、また手をつないで登校した。爽やかな朝、学校に着くと、わたしたちの教室が騒がしくなっていた。

「うおおお！ そうた、おまえのふく、やすそうだなあ。やすそうたのふくは、やすそうだなあ」

「まーた、やなぎかい。バカなこといつてるのは、やなぎかいかい」昨日の二人が、楽しそうに言い争っている。クラスのご達も、クスクス笑いながら見物していた。

「すごいね、あのふたり。もうクラスのにんきものになってる」それを見て、ゆうくんも楽しそうにそう言った。わたしが、うん、と頷いてから、あらためて教室の中を見ると、昨日の大きなおとこのこが面白くなさそうにしている。自分が突っかかって行った相手、人気者になったのが気に入らないんだ。事実、そのこは悪者扱いされているかのように、周りに人が居なく、ひとりでポツンとしていた。

「おはよう」

わたしとゆうくんは、手をつないだまま、口をそろえて挨拶をし、教室に入って行った。すると、大きいおとこのこが、獲物を見つけたというように、ニタリと笑ってわたいたちに近づいてきた。

「ビュービュー、なががいいね、おふたりさん。けっこんしきはいつですかー？」

教室中に響く大きな声で、わたしたちに言った。大きいおとこのこは、自分が目立つたために、何か話題が欲しかったんだと思う。

「えっと、ゆうくんのじゅうはちさいの、おたんじょうびのひ。おとこのこはホーリツでじゅうはちさいまでけっこんできないから…」

…。ね？ ゆうくん」

「うん」

わたしは、そう答えた。前に、パパやママから、そのホーリツのことを聞いていたから。

そうすると、教室中がしーんとなった。おとこのこは、わたしたちの予想外の反応に、啞然としていた。

「そ、そんなの！ いまおもってるだけだろ？ おおきくなったら、すぎじゃなくなるよ！」

おとこのこは動揺して、苦し紛れにそう言った。

「そんなことないよ。そんなことない。ぼくは、あおいちゃんのことか、うまれたときからいままで、ずっとすきだし、それはこれからもかわらない。そしてそれは、あおいちゃんもいっしょのキモチのはずだよ。ね？ あおいちゃん」

嬉しい。わたしは素直にそう思った。わかつてはいることでも、言葉にしてもらえると、やっぱり嬉しい。だから、わたしはすぐに頷いた。

大きいおとこのこは居心地が悪くなったのか、駆け足で自分の席に戻って行った。

「おまえら、おもしろいやつらだなあ」

カイクンが、わたしたちを見てそう言った。

「カイクンたちのほうが、ぼくはおもしろいとおもうよ」
ゆうくんの言葉に、わたしはコクコクと頷く。

「じゃあさ、おもしろいおれたちがあつまれば、がっこう、すげえたのしくなるんじゃない？」

ソウタくんが、カイクンの後ろからやって来て、そう言った。

「しってるかもしれないけどさ。おれはカイ。こいつがソウタ。おまえらは？」

「ぼくはゆう。こっちがあおいちゃん」

わたしはペコリと頭を下げる。そして……。

「よろしくっ」

四人の口が、一斉に開かれた。鳴り響く温かなハーモニー。クラスのことたちは、羨ましそうにこっちをみている。

わたしは、声を出そうとした。でも、恥ずかしくて出せなかった。すると、ゆうくんがわたしを見て、ニッコリほほ笑む。わたしの手を握る力が、少し強くなった。

「みんなも、これからよろしくねっ」

ゆうくんが、クラスみんなに大きな声で言った。それは、わたしが言いたかった、でも言えなかった言葉。わたしが伝えたかった想

い。言葉にしなかったそれは、他の誰にも伝わることが無かったけど、ゆうくんにはだけは、わたしの気持ちが伝わっていた。

みんなが、うん、と返事をした中、大きいおとこのこは、ムスツとした顔で黙っていた。

「おまえもだよ！」

ツカツカとソウタクくんが、大きいおとこのこの机に向かって行き、そう言った。

大きいおとこのこは、びっくりした顔をした後、照れくさそうに、「うん、よろしく」と言った。

それからわたしたちは、あさのがっかつが始まるまで、みんな笑顔で話し合い、笑い合っていた。

朝日が差し込む、明るい部屋。私は目を覚まし、体を起して伸びをする。

「おはよう、葵」

私の隣で、同じように伸びをしている優が、ニツコリと挨拶をしてくる。きつと、ほとんど同時に目を覚ましたんだろう。

「うん。おはよう、優」

私も、自分ができる最高の笑顔で、それに応える。

「ごめんね、昨日は帰るのが遅くなって。なかなかカイ達が解放してくれなくて……。寂しくなかった？」

「ううん、大丈夫。私も友達と遊んでたから」

穏やかな朝。それは昔も今も、変わらない。大好きな人と過ごすゆつくりとした時間は、幸せそのものだった。

「それより、何か楽しい夢でも見てた？ 寝てる時、楽しそうだったけど」

優は、私の顔を見て、そう言った。私はそれに、笑顔で頷く。

「実は、俺も見たんだよ。楽しい夢」

穏やかな、優しい優の表情。

「ね、どんな夢だったか、同時に言わない？」

私は、優の見た夢が何だったか、わかっている。それでも、聞いてみたいと思った。

「いいよ。じゃ、せーの……」

優の掛け声に合わせて、ふたりで同時に息を吸う。

「カイと颯太に会った時の夢」

「カイ君と颯太君に会った時の夢」

ふたりで同時に言って、ふたりで同時に笑いだす。

「あのさ、葵……」

優が口を開く。

「なあに？」

優の言いたいことは、わかっている。それでも……。

「大好きだよ」

言葉にされるのは、やっぱり嬉しい。そして、それはきっと優も、同じはずだから……。

「うん、私も優のこと、大好き」

互に見つめ合い、朝の幸福を共に感じる。

昔の様に四六時中一緒にいる訳ではないけど、私達の関係は、心は、昔も今も揺らぐことはない。それは、これから続く未来も、きつと……。いや、必ず……。

私と優の唇が、どちらからでもなく触れ合った。目の前に映る、優しく、穏やかで綺麗な顔。それは、私と共に在り続けてくれる、私の大好きな人の顔。

どれだけ続くのかわからない、未知なる人生。いつか迎える最期のその時まで……。優、私は、貴方と共に……。

破天こーメイツ外伝2 幼き日々の思い出(後書き)

どんな感じでしょうか？

この話は、本編で書く予定でしたが、そんな隙はなさそうなので、このような形で投稿させていただきました。次回更新は、不明です。

破天こーメイツ外伝3 クレイジーライフ(前書き)

外伝はマジメ系？ そんなことはないですよ。

だって、マジメ系は望まれていないでしょう。この作品においては。まあ、今後もマジメなものが出てくるかと思いますが、今回はバカを一名投下。

さあ、暴れてやりなさい！ 栗林遙、外伝一回目の主役となります(一回目です。二回目も予定されております。今回のだけでは……暴れ足りないでしょう)。

破天こーメイツ外伝3 クレイジーライフ

イツエエエエイ！ 栗林遙、ここに見 参！ 世間じゃ「驀進のバカ」なんて呼ばれているけど、実はそれは世を忍ぶ仮の姿。みんなには黙っていたけど……実はアタシ、賢い子なの。その証拠に、アタシをよく知る家族や親族からは「せいめんたいこ聖明太子の再来」と謳われているわ！ 騙してごめんね、破天高校トップバカの皆……。

「で、なんだっけ？ 彩那」

そんなわけで、賢いアタシは今、一人のいたいなクラスメイトから質問を受けているの。ちなみに今は、いわゆる休み時間ってヤツね。七月下旬……昼は暑いわね！

「えっと……。トップバカって何なの？ 遙ちゃん。私、実はよく知らないんだけど」

今回の質問主は、綺麗で可愛い顔立ちの可憐な少女で、アタシのクラスメイト兼部活仲間プラス親友の双葉彩那ちゃん。か、かわいいわ……。なんかスリスリしたくなるよ、このコを見てると。

「遙ちゃん、ヨダレ出てるよ？」

ハッ……！ あまりの可愛さに、ちょっとトリップしていたわ！

双葉彩那……恐ろしい娘！

え〜と、何を質問されてたっけ？ ああ、破天高校トップバカについてだったわね。

「教えてあげるわ。この『聖明太子の再来』と誉れ高い、栗林遥様が！」

（聖明太子……？）

なんだか彩那が不思議そうな顔をしているけど、気にしない。天才は、いつの時代も他人には理解されないものだから！ それが時に寂しく感じるけど、天才として皆を幸せにするためだから、アタシは耐えられるんだ。

「この学校におけるトップバカとは、入試での『筆記試験の点数』

と『面接試験の態度』より、職員会議で設定される、その名の通り頭がアレな人の集団よ！」

アタシや英徳みたいに、本来は賢い人もたまにいるけどね。

「ちなみに八年の歴史の中で、この汚名を返上した者はいないわ！そんなことができるような人は、初めから設定されない訳ね！」アタシは返上しないだけよ？ と、付け加えておく。

「あ、名誉棄損にはならないわよ？ 入学する時に、誓約書にサインしているはずだから」

全く、無駄なことばっか頑張る学校よね。ま、そこが良いんだけど。

「ていうか、アタシ達は名誉棄損だと思うどころか、トップバカの称号に誇りすら持っているわよ」

「へえ〜。勉強になるかも」

彩那はアタシの話、一つ一つに反応を示す。かわいい……。なんか苛めたくなっちゃう。……。よし！

「そういえば、なんでそんなことを急に訊いてきたのかなあ〜？」自分で言うのもなんだけど、今のアタシの顔は相当ユルユルになっていると思う。このコがかわいいからいけないんだ！ だからその責任はとってもらおうわ。可愛いしぐさで！

「えっと……。あの。それは……」

彩那は赤面し、アタフタ慌て、やがて俯く。うおおおおお！ 可愛すぎるぜ！ マイフレンド！

やがて、彩那は何か思いついた様に顔を上げた。

「ほら、書道部って、トップバカの人たちが多いから……。皆のこと、出来るだけ知っておきたい……。……」

ま、それも嘘ではないでしょうけど。もう一つ理由があると、アタシは思う。

「それじゃ、アタシが書道部トップバカについて、本人の目の前で解説してあげるわ！ それぞれ称号的なものと特徴があるから、直接観察しながらの方が良いと思うし！ うん、決定！ はい決定！

それじゃ、今日の部活の時ね〜！」
「え？ め、目の前？ それはちよつと……」
何か言ってる、何か言ってるけど、アタシは止まらな〜い。それが「慕進のバカ」の由来だから！
カモ〜ン放課後！ 早く来〜い、部活タイム！ 授業なんて〜、寝てればいいのさ〜！ イエ〜イー！

アタシが目を覚ますと、教室が騒がしくなっていた。
「事件ね！」

アタシの刑事としての血が騒……。
「放課後よ」

……彩那、ツッコミが早いわ。

「じゃ、部活ね！ マツハで行くわよ〜！」
彩那の手を握って走り出す。ああ、細くてきれいで可愛い手……。
どーだ、周りの野郎共！ 羨ましいだろう！

部室は私たちのクラス、二年二組と同じ二階にあり、すぐに到着！

「まだ誰もいないね」
がら〜んとした部室を見て、彩那が言った。

「てえええい！ 奴ら、たるんでらあ！ まあいいわ。アタシの解説からいくわよ！ メモの準備は良い？」

「は、はいっ」
少し上ずった声で返事をし、可愛いメモ帳と可愛いペンを取り出す、可愛い彩那。……グランドスラムね！

……と、そこへ……。

「こんにちは」

短黒髪の無愛想なメガネヤロー（眼鏡は掛けてないことが多い）が、部室に足を踏み入れる。

「エ・モ・ノ……来たぁー！ 彩那、コイツは坂上龍次郎。通称『神力のバカ』で、猛勉強してるくせに、テストでは一点も取ったことが無いわ。マークシートですら！ コイツほど不幸なバカ、世界中を探しても、コイツ一人だと思うわ」
アタシは捲し立てる。龍次郎は、それを無視して部活の準備を始めた。

「今日は古典の臨書に励むゆえ、邪魔はしないでもらいたい」
それだけ言っと、黙々と練習を始めた。

「臨書かぁ。偉いね」

「ま、マジメなのは良いことだけだね。次は！ アタシの……」
「……………」

うおおおおお？ 何か、いる！ いつの間にか、ヒョロヒョロした目つきの悪いサラサラヘアアのダンマリ小僧が！ 部屋の中にいるうー！

「くっ……！ まさか二連続で来るとは……！ コイツは通称『清閑のバカ』、三枝英徳！ さっきの『神力のバカ』と同じく、一点も取ったことが無いわ。コイツは取れないんじゃ無く、取らないだけなんだけど」

コイツも無視してくる。まったく、ノリが悪いし無愛想だし。ダメね、コイツら！

その後、ワイワイと集まって来る普通の部員達。ああ、もう！
うるさくて話せないじゃない！

「こーんにつちは」

そしてそこへ、茶髪で元気な女の子が現れた。

「ヤッフウウイ！ ハロツハー、マ〜ナ！」

「あ！ オハロツハー、は〜るちゃん！」

やっと来た……。ノリのいい元気な女の子。待っていたわ、マイ・メシア！

「あら？ カイ君とサエちゃんは？」

彩那は、キョロキョロと辺りを見回し、尋ねた。

「え？ カイはもう少ししたら来るよつ。お昼ごはんの時、カイのデザートプリンをりつきーが食べたとかで、今戦ってるから。で、サエちゃんは風邪でお休みっ」

「バカナコたち……。ていうか、りつきーって、曲がりなりにも教師よね？ なにやってんだか……。」

「まあいいわ！ 彩那、こちらの苗木愛美ちゃんこそ『澆刺のバカ』という、素晴らしき、そして愛すべきバカよ！ いやー、こんなノリの良いバカナ女の子、他に居ないわ……。」

彩那は、ふむふむとメモ帳に書きこんでいる。このおバカナコと、いい、彩那といい、可愛いなあ、もう！

「えー？ 私、はるちゃんほどじゃないよっ？」

無視しない！ このコはあの無愛想バカコンビと違って、アタシを無視しないわ！ もうサイコー！

そんなコを裏切っているかと思うと、心が少し痛むわね……。ごめん、マナ……。アタシ、バカじゃないのよ……。なんて、言えないわ！ このコを傷つけないためにも、バカナ振りをしなくちゃ。

「ま、このアタシに勝とうなんて、十年は早いかしらね！ それはそうと、彩那。アタシの解説は役に立っているかしら？」

コクリと頷く彩那。ここで、アタシとマナはしばしのお別れ。そしてまだ来ていないバカを待つ。ここまで来たら、アタシは最後でいいよね？

「こんちー」

部員がある程度集まり、部室に入ってきた人がいなくなった頃、ソイツは姿を現した！ 黒い、男にしては長めの髪。綺麗な黒い瞳と、キリッとした目つき。そんなルックスから放たれる、まさかのバカオーラ。

「こんにちは、カイ君」

こんなバカには勿体ない、眩い、かわゆい笑顔で、彩那が挨拶する。

「彩那！ コイツが『炸裂のバカ』よ！ この柳海は入試の時、鎌

倉幕府が出来た年を問われて『良い国』年と答えたバカなの！」

まったく、情けないにもほどがあると思う。不覚にもアタシはこの話を初めて聞いた時、吹き出してしまったわ。

ん？ カイが呆れたような視線をこちらに向けている……？

「いや、俺は確かにそう答えただけさ。お前、入試の時にわからなかった問題全てに『知らぬが仏』って書いたらしいじゃん。しかも、ほぼ全問わからないから、回答欄がほとんどその言葉で埋まっていたとか……」

はううっ！ な、なぜそれを……！

「てか、なに？ いきなり語りだして」

「どうやら我々トップバカについて、彩那部長代理に解説しているようだ」

龍次郎を筆頭に、わらわらと集まって来る書道部所属のトップバカたち。

「あ、うん。私、トップバカって何か、よくわからなかったから……」

「これで全員揃ったけど、はるちゃん自身の解説はしたのっ？」

「え？ まだだけど……」

バカたちと彩那の会話。

「だったら俺達が解説しよう」

「ずい、と前に出るカイ、龍次郎、英徳。マナはその場で黙って待機……複雑そうな顔で。」

……って、何言ってるの？ 彩那への解説はアタシの役目……。

「コイツはトップバカ中、最もバカなヤツだ」

三人が口を揃えて、微塵もズレることなく言った。

「……多分、自分がバカだとわからないほどにな……」

カイが付け加える。憐みの眼差しをアタシに向けて……。

「ちよつと！ アタシ、バカじゃないてば！ 身内からは『聖明太子の再来』とまで言われてるのよ！」

ああ、言っちゃった。みんな、ショックだろうな……。実はアタ

シが賢かったなんて知ってしまったて……。

「聖明太子？ 聖徳太子とでも言いたかったのだろうか」

「……だろうな。要するに……」

「栗林家は全員揃ってバカということだ」

……………。

龍次郎、英徳、カイからの精神的攻撃。……そっか、アタシって、バカだったのか。しかも、一族揃って。

「アタシ、ちよっくら旅に出てくるわ……」

そっだ、海に行こう！ 家族で！ 少し、自分たちを見つめ直す機会が必要なんだと思う。

七月下旬。学校行事を間近に控え、アタシは修行の旅に出る決意を固めた。

この後、アタシは山で迷子となるのだが、それは別のお話……。

破天こーメイツ外伝3 クレイジーライフ（後書き）

サブキャラ〜。サブキャラ大好き〜、んふっふ〜。

あ、読み終わりましたか。すみません、超脇役視点で。

ですが、今後こんな感じですよ。次回は誰に、し・よ・う・う・か・な

）
本編共々、今後ともよろしくお願いします。

破天こーメイツ外伝4 悲劇の夜の裏側で（前書き）

お待たせしました。

いえいえ、落ち着いてください。「待ってねーよ」「といっしっ」
は入れるまでもありませんよ。自覚しております。

さて、今回の主役は、慧君です。

警告：今回の話は、今までの本編・外伝のイメージを損なう可能性
があります。お気を付け下さい。

また、コメディ要素は十パーセントほどです。

では、どうぞ。

破天こーメイツ外伝4 悲劇の夜の裏側で

二人で、闇に向かって一歩踏み出す。暑い夜の中、全身で感じる、肌を撫でる微かに涼しい風と、木々の暴れる音、虫の悲鳴のような鳴き声。別に恐怖を感じている訳じゃないけど、警戒しているからかな……こんな感じを受けるのは。ん？ 警戒しているってことは、少なからずとも恐怖を感じているのかな。よく……わからない。

「どうしました？ 葉倉さん」

気がつくのと、とある森の入口で足を止めていた。隣にいる人物、越水美里……だったっけ？ いや、ツンでいいか。そう、隣にいるツンが、その行動に疑問を持ったのか、話しかけてきた。

「ごめん。ボーっとしてた」

今居るこの森は、肝試しの舞台になっていて、ツンと二人でそれに参加中。ただの学校行事の肝試しで、ここまで警戒し、動揺するのは、前の参加者達が次々と気絶してリタイアしていたからだろう。「……一つ、お伺いしてもよろしいですか？」

堅苦しい敬語を使う同級生の女の子。それでも彼女なりに砕けた言い方をしているらしい。

ま、それは置いといて……。ツンが何を訊きたいのか。それは簡単にわかった。

「勉強のこと？」

説教が始まるのかな。いや、前までのペアは五分くらいで気絶してるし、そんな時間は無いはず。いやいや、でも、今足を止めてるからなあ。

説教が始まったとしても、すぐにそれどころではなくなるように、ゆっくりと、足を動かし始めてみた。

「はい。貴方が勉強をしない理由についてです。貴方は授業をまじめに受けていませんし、家でも勉強をしていないと聞きます。それでも成績は、学年でも上位。劣等感がある訳ではありませんよね？」

眼鏡のレンズ越しに見える真剣な眼差し。いつだって彼女は全力なんだ。静かなる炎が宿る眼で、じつと見つめてくる。

「まあ……無いかね」

「貴方の普段の態度からは、勉強が嫌いだという印象は受けません。むしろ、好きなのではないかと思うのですが」

「数学とか英語だけじゃなく、人間観察もできるんだ……ツンは。

「まあ、そうだね」

「では何故、勉強をしないのですか？」

ツンは恐らく、切磋琢磨する相手が欲しいのだろう。並の生徒では、彼女の学力には遠く及ばず、努力してもその差はほとんど埋まらないだろう。

意志の宿る、一直線の強い視線。まいったな……弱いんだ、こういう眼には。

「ツンって、秘密は守れるタイプ？」

「はい」

即答か。まあ、そうだろうね。ツンがペラペラと人の秘密を喋るところは想像できない。

「じゃ、これから話すことは内緒で頼むよ。カイやソータも知らないことだから。あと、ちょっと長いよ？」

これまでの人生の軌跡。肝試しのアクションが始まるまで、どれだけ語れるかわからないけど、話してみよう。彼女はきっと、それで納得してくれるから。

目が覚めると、いつも同じ部屋。でもそこは、自分の部屋じゃない。誰の部屋でもなく、誰の部屋でもある。白いベッドと、白いカーテンを通して入って来る太陽のヒカリ。独特のにおいと、独特の雰囲気。もうここにいるのは……慣れた。

ある病院の一室。葉倉慧はそこにいた。入院してから、どれくら

いの月日が流れただろう。三年くらいかな？ 退屈な時の流れに生きて、時間の感覚が狂っている。

もう、そんなに？ まだ、それだけ？

「母さん。僕、いつ治るの？ 僕、学校に行きたいよ」

訊いても無駄だとわかつてる。親を困らせるだけだとわかつてる。だって、葉倉慧の入院の原因は……。

「ごめんね、ケイ。それは、母さんも、お医者さんもわからないの」
涙を浮かべながら、申し訳なさそうに答える母の顔を見て、ズキズキと心が痛む。こうなることは、わかつていたはずなのに。

原因不明の病。ゆえに完治・退院についても不明。わかっているのは、少しでも活動すれば、いや、寝ている時でもたまにだけど、吐血し、激しい胸痛で意識が無くなる……それだけだった。そんな体で学校に行けるはずもなく、小学二年生の時から、この病院に入院している。

「じゃあ、母さんこれから仕事があるから、また明日ね、ケイ」

お互いに、手を振って別れを告げた。主婦だった母は今、父だけでは苦しい入院の費用を稼ぐために、仕事をしている。

訪れる退屈な時間。いつ退院しても良いように、普段から勉強はしているし、嫌いじゃない。ただ、いくら嫌いじゃないと言っても、役に立つ時が来るのかもわからない勉強で、全ての暇を埋められない。

時計の針が刻む音が、病室に虚しく響く。時計の音以外に聞こえるのは、自分の呼吸音とため息。それから……徐々に速くなる心音！ 発作の前兆。胸にこみ上げる、鈍いのか鋭いのかもわからない激痛。血潮が全身を駆け巡り、体が発熱する。荒くなる呼吸音と、漏れる咽び声。

ひとしきり苦しむと、口の中に鉄の味が広がる。目にはもう、霞んで景色は映らない。

手探りでナースコースを押すと同時に、激痛で意識が途絶えた。恐らく、シーツは鮮血で染まっていただろう。一様な色の部屋に、

一つの色の反逆。白とは対照的な紅の色は、違和感そのものだったはずだ。

再び目を覚ます。そして思う。「まだ、生きているのか？」と。ベッドのシーツは真っ白だ。恐らく看護師の人が取り替えてくれたんだろう。発作は夢だったんじゃないかと思うときもあるけど、胸に残る微かな痛みと、口に残る血の味、そして、取りつけられた数多の医療器具が、現実だったのだと主張している。

もうすぐ日が沈みかけるのだろう。日は傾き、僅かに黄金の色を放っている。

生きているのが嫌になる。辛い思いをしてまで、無いに等しい希望に縋って生きるのが、もう嫌だった。でも、自ら命を絶ちたくはない。発作の度に味わう死の恐怖。皮膚にもそれが、愚かな行動への想いを断ち切っている。

モノクロの世界に彩りを与えるのは、夕陽の赤と……自分の血の紅。そうしてまた、一日が過ぎていく。

翌日、また発作で倒れた。

目を覚ますとまた、日は沈みかける直前だった。金に輝く光は、闇へと変わる予兆の光。綺麗なはずの景色も、もう悲観的にしか見られない。

死にたい、死にたくない。どちらかわからない。死ぬ気はないけど。だから、前者の想いが勝ってはいないと思う。だけど、後者が勝っているわけでもないんだ。想いは均衡をギリギリ保ち、常時不安定に揺れている。ふとしたきっかけで、どちらにも転ぶんだ。

ベッドに入りきりだったからからだろう。汗が額に浮かぶ。

違和感を感じる。本当にそのせいかな？
呼吸が乱れる。これは動揺のためか？

カラダが……アツイ！

信じられなかった。今までに、こんな短い間隔で発作が来たことなんて、なかったから。だが、強烈な胸の痛みが、ソレの再来を証明している。

そして、いつもと違ったのは、それだけではなかった。

口に溜まる血を吐きだすも、意識がはつきりとしている。強くなる痛みで、体が自由に動かさず、叫び声すら喘いで出せない。看護師を呼ぶこともできずに、味わったことのない痛みと苦しみを、ひたすらに呟えた感覚で味わうだけ。

その時、心が折れる音を聞いた気がする。耐えきれぬショックに、何かが壊れたんだろう。

(……もう、死のう……。これからも、こんな苦しみが待っているかもしれないんだ。耐えられる……。わけがない)
しばらくして発作が止むと、汗と血で汚れた自分が、弱まる胸の痛みを感じながら、涙を流しているのに気がついた。

それは苦しみからの涙でもあるが、それだけじゃない。この世と別れる、名残の涙。

そうして、徐々に、本当に徐々に起き上がり、よろける体で病室の窓に向かい、手を掛けた時だった。

「やめるおー！ー！ 離せ、離すんだあー！ー！」

年が同じくらいの子どもの声が、窓の外、つまりは病院の中庭から聞こえてきた。

「ちよっ……！ カイ、うるさい！ 静かに！」

「だまれえー！ー！ 悪の手先が！ 俺を殺そうとしただろ！」

黒髪の男の子が、大人の女の人に手を掴まれ、ジタバタしている。

「ただの予防接種！ 死なないって」

「お前、注射だぞ？ 刺すんだぞ？ 痛いんだぞ？ それはもう、死を意味している！」

あの子は注射程度で、何を言っているんだ？ 正直呆れてものも言えない。どうしようもない痛みを抑えるために注射を打つ「葉倉慧」にとつて、その子の言葉は理解できないものだった。っていうか、情けないヤツだと思った。

「アンタ一年生の時、橋から川に飛び込んだでしょ。それに比べれば、注射くらい楽勝だった」

……橋から川に飛び込んだ？ なんで？

「バカが。あの時はお前のためだろうが！ だが、予防接種は誰のためでもない。だから、誰も得しないソレのために、金を払ってまで痛い思いをする必要はない！ 違うか？」

「いや、違うから。アンタのためだし」

「くっそがぁー！ なんてお前は最近、俺を捕えられる様になつてんだよ！」

「さつきはスルーしたけど、親に向かって『お前』って何だ！ ……

…ま、アンタを捕えるために、こちらら毎日鍛えてるからね」

男の子の母親は、ガツンと男の子の頭をぶつと、ズルズルと病院内に引きずった。

病気になつていなければ、自分もさつきの人たちのように、元気に楽しく過ごしていたのだろうか。治る希望は、無い訳じゃない。発作が起きても、今のところ死ぬわけじゃない。生きる希望は、確かにある。さつきの子のように、楽しく過ごせる可能性も、ゼロじゃない。

絶望しかしていなかった「葉倉慧」は、楽しそうなさつきの子に、少しだけ興味がわいた。

窓の手すりから手を離し、不安定な足取りで病室を抜け出した。

病院の待合室に、一組の親子がいる。さつきの黒髪の男の子は、退屈そうに座っている。母親の方は腰を上げ、一言男の子に告げ、

去って行った。多分、トイレかな。

その隙に、男の子に声を掛けてみた。

「こんにちは」

するとその子は、パツと目を輝かせてこっちを向いた。……よっぼど暇だったんだろうな。

「おう、なんだ？ ……つて、誰だ？」

期待に満ちた目で見つめられる。

「えっと『葉倉慧』っていうんだ。暇だったから、遊びに来たんだけど」

「遊びに」と言った瞬間に、期待の目は歡喜の目に変わった。

「ほほおう。ケイ……ね。俺は『柳海』だ。じゃ、自己紹介も終わつたし、サッカーでもやろうぜ！」

その時、素直に「ああ、カイは……バカだ。それも、凄いバカだ」と思った。

「いやいや！ ボールないよ！ しかもここ、院内だよ！ サツカーとかダメだから！」

久しぶりに大きな声を出して、声がかすれた。

「それに、体が弱いから……」
自分を指差して付け加える。何故だろう。自分のことを「僕」と言えない。

「ん？ そうなの？ だが、安心しろ！」

カイは、自信満々に胸を張る。何を言い出すのか、全く予想できない。

「俺は……頭が弱い！」

「ごめん、知ってる。すごいなあ……自覚、あったんだ。

「つまり、お前が作戦を考え、俺がそれを実行する。弱点を補い合い、共に戦うぞ！」

「……誰と？」

「しまったぁー！ 忘れてたぁー！」

バカだなあ、カイは。失礼だけど、心からそう思う。

「おい、ケイ。人のミスで笑うなよ……」

「えっ！」

カイの一言で、思わず驚く。辛い日々の中、いつしか笑うことが出来なくなっていたはずなのに。死を覚悟して、自分自身を、感情も含めて消すつもりだったのに。

いつしか出来た笑みと共に、涙が一筋、目から流れる。

「おい、どうした？」

そうか。死ぬってことは、こんな楽しみも味わえなくなるんだ。辛いばかりの日々で、すっかり忘れていた。「僕」と言えなくなつたのは、きつと、自分で自分の心を殺したからなんだ。今の「葉倉慧」は、本体の残り火。殺しきれなかった自分なんだ。「葉倉慧」は自分を殺したと深層心理で思っている。では、今の自分は誰なんだ？ わからない。でも、自分は殺したはずだから、もう「僕」はこの世に居ない。だから、使えない。

「実は」

泣きながら自分を指差した。

「さつき……」

カイに全てを話した。病気のこと、死のうと思つたこと、自分を「僕」と呼べないこと。

するとカイは、笑いながら言つた。

「よくわかんないけどさ。苦しいなら、それ以上楽しめばいいんじゃないか？ 人生なんて、楽しまなきゃ大損だぜ？ いつかは皆、死ぬんだからさ」

それは、他の誰かが言つたことなら、きつと苛立つ言葉だった。

「お前に何がわかるんだ！」と、怒つたかもしれない。

でも、カイに対して、そういう気持ちは湧かなかつた。カイはバカだから。嘘もつけないほどにバカだから、本当の気持ちがあつすぐ伝わって来る。偽善者の戯言でも、同情の励ましでもない、毎日楽しく生きているバカの、汚れなき言葉。

「先に遊びを誘つて悪いけど、病室に戻るよ」

(今度は、君と一緒に遊べるように)
最後の言葉は、泣き声を堪えるのと、胸の痛みから、伝えることが
できなかった。それでもカイは……。
「おう！ またな、ケイ！」
心を読んだかのように、そう言った。

暗い森の中、ツンが涙している。

「と、まあ……。こんなことがあった訳で。なんだか精神的シヨックで多重人格気味になったりしたんだけど。あ、病気は治ったよ。それから体を鍛えるために、剣道とかやってるし」
そろそろ、肝試しの仕掛けが来るころかな。

「なんと感動的なお話……！」

「まあ、カイはすっかり忘れてるみたいだけど。バカだから……。でも、そんなカイと、一緒に遊んでいたいんだ。病気が治ったの、医者には奇跡だって言われたんだ。『生きたいという強い思いが通じたんだらう』って。その強い思いを与えてくれたカイと楽しく遊ぶ方が、死んで出来なくなるはずだった勉強よりも大切なんだよ」
「わかり……。ました……。そういうことなら、無理に勉強しろなどとは……。言いません……」

ガサガサと物音がする。ふふっ、甘いなあ。本気で死を覚悟した者に、肝試しが通じる訳無いでしょ。

このあと、極限の恐怖を味わうことになったというのは、別のお話。いや、あの時死ななくてよかったよ、ホント。「死ぬのって、マジで怖いんだなあ」と、心からそう思った。

破天こーメイツ外伝4 悲劇の夜の裏側で（後書き）

えっと、どうでしたか？

そういえば、本編の方には何人かの方が感想をくださったのですが、外伝は皆様、どう思われているのでしょうか。

果たして需要はあるのでしょうか。この調子でマジメ系を多くしても良いのか、前回みたいなのオンリーにした方が良いのか。悩みどころです。

あ、ちなみに次回は、推理風味でいきます。まあ、あくまでも風味ですが。

破天こーメイツ外伝5 私は誰でしょう？（前書き）

お越しいただき、誠にありがとうございます。 有言実行。前回の宣言通り、今回は推理風味で楽しんでいただけたらと思います。

問題 ジャジャン。今回の主人公を推理して当ててください。ちなみに難易度は凄く高いです。 それでは、また後書きでお会いしましょう。

破天こーメイツ外伝5 私是谁でしょう？

俺がこの春入学した高校、私立破天高校は普通の学校ではなかった。どのように普通ではないのか。入試の際の合否判定とか、建設費及び運営資金がありえないくらい高そうとか、卒業生の進路が一人残らず凄いとこころ……なんてのは、大したことじゃない。

大したことあるのは……教師、生徒、用務員、全ての人間が個性的……いや、変人なところだ。

小学校の時、クラスの人気者だった俺が、空気のように薄くなるほどに、奴らのキャラは濃過ぎなんだ。ああ、いや、空気といっても無視されている訳じゃない。相対的にキャラが薄く見えるだけさ。で、俺は一年四組なんだけど、まあ凄いキャラのヤツばっかだよ。最初に驚いたのは言うまでもなく、学校生活の初日、入学式の日だった。あ、最初と言うのは語弊があるな。入試の日にも驚いたし。

だがまあ、これはそんな入学式の日の話。

俺は、ピカピカの制服に身を包み、少し緊張した面持ちで学校に向かっていた。入学式で緊張するような性格ではないが……。

「やつほう。今日から高校生！ 今日から青春！ ほっほう」「恥ずいこと大声で言ってるじゃねーよ。と、言いたいところだが、俺も踊りださずにはいられないぜ！ いやっほうい！」

これが周囲の新入生の話し声だ。

こんな中に果たして溶け込んでいけるのだろうか、俺は。自慢じゃないが、俺は中学生の時、クラスの連中に「お前お笑い芸人になれるんじゃないか？」とか、結構言われていた程テンションが高く、ノリも良かった。しかし……。

「ちよっと！ それアタシのお菓子でしょー！」

「そんなにたくさんあるんだから、一個くらいいいじゃない。ケチ」
「ダメー！！」

無理だろう。さすがの俺もついて行けない。なに？ コイツら。
小学生？

だが、今の二組など、まだマシな方だ。真剣にヤバいのは……。

「おい、カイ！ テメエ逃げんじゃねえよ！」

「は？ 逃げてねえし！ 回避してるだけだし！ 当たる攻撃を避けないとか、バカなだけじゃん？」

「おいコラ、テメエ攻撃してこねえだろ。逃げ回ってんのと一緒だろうが」

「こつちはチャンスを窺ってんだよ、バカソータ。どうだ、知的だろう？」

真剣にヤバいのは、この長めの黒髪の男と、赤茶の長めの髪の男だ。この会話、確かに内容も酷いもんだが、問題は……。

「お前つ！ 壁使うなよ！ くつそ、この壁邪魔くせえ！」

「障害物は使ってこそ意味がある。フィールドをうまく使うのも、戦術だろ？」

このバカ共が俺を障害物にして追いかけてまわしていることだ。初対面だぞ？ 本人目の前にして壁とか邪魔とか障害物とか言ってるし。

もちろん嫌だ。だが、関わりと口クなことになさそうなのは一目瞭然。なので、コイツらが飽きるのを待っているという訳なんだ。

そんな感じでこのバカ共を無視していると、一組の男女が近づいてきた。

「二人とも、迷惑だろ？ ほら、ケンカするなって」

「この二人が迷惑かけてごめんなさい。二人とも悪気はないと思うんだけど。私達で注意しておきますから、どうか許してあげてください」

保護者登場……？ お母さん（？）可愛すぎだろ……！ と思ったら、二人とも制服を着ている。どうやら新入生のような。いやあ、女子の方かわいいな！。

もう少しあの女子を見ていたかったが、バカ二人が言い訳を始めたので、俺はその場を後にした。

……あの娘と同じクラスになることを祈りながら。

学校にたどり着き、自分のクラスを確認する。なるほど、俺は四組か……。

まさか登校中の時みたいに、教室が混沌たる世界になっているんじゃないだろうか。ありえる。登校中の時のアイツらだけが、テンションがおかしいとは限らない。

俺はドキドキしながら教室のドアを開けた。

その瞬間、元気な声が聞こえてくる。

「見て見てー、麻衣子ちゃんっ。『貴女をトップバカのバカ三人衆に任命します。通り名は”澆刺のバカ”です』だって！ 嬉しいっ」「マナ。それ、嬉しいの？」

「もっちろん！ この学校では名誉なことなんだよっ」

嗚呼、やっぱり。思った通りだ、バカがいる。

もしかして、この学校はバカの収容所なのか？ と思いながら、指定されていた席に座ると、横からカリカリと音が聞こえる。何だろうと思ひ、見てみると、そこには一心不乱にシャープペンを動かす眼鏡の女子がいた。何してるんだろう？

もう少し良く見てみると、有名大学の過去問が積み重ねられているのに気付いた。

おかしい。合格者の共通点が無くなった。良く考えれば、さっきバカ共を止めてくれた可愛い娘とそのツレもまともだったし、教室のドアを開けた時に聞こえた声の主の一人もまともだった。

そんなことを考えていると、四人の生徒が教室に入ってきた。

「カイ、テメエ。後でブツ潰すからな」

「優、葵、聞いたか？ アイツが一方的に俺を……！」

「颯太、反省したんじゃないのか？」

「颯太君、ケンカは駄目だよ」

「ぐう……！」

うっわぁ、アイツらだ。同じクラスかよ。そりゃぁ可愛い女子はいいけど。そのツレもいいけど。

「おいソータ。アレ、さっきの壁じゃね？」

「お、マジだ。おい、カベ！ さっきは悪かったな」

バカ共が俺を見つけて近くに來た。壁……だと……？ コイツら反省してないだろ、絶対。

「いいよ、別に。気にしてないから」

ま、俺は大人だし、紳士だし、心が広いから笑って許せるのさ。

「おおー！ カベ、お前良いヤツだな」

「カイ、何言ってるんだ？ あんな細げえこと、誰も気にしねえよ。な？ カベ」

「……」

「そうか？」

「そうだって。なぁ、カベ」

「……」

「おい、カベ。どうした？ 返事しろって」

「カベ？」

「……」

「おい、カ……」

「カベって呼ぶなあぁあ！ お前ら失礼すぎだろおー！」

「うわぁっ。カベがキレた」

「だから俺はカベじゃねえー！」

もう許せん！ いくら大人で紳士でも、限度つてもんがある。

「くらえバカ共おー！」

俺の必殺、右ストレートが唸る！ ……が、カイとかいうヤツにあつさり受け止められた。

「良い拳だ。だが、当たらなければ意味は無い」

「いや、一応当たってはいるけど……」

いや、そんなショックを受けた顔をするなよ。ツッコんだ俺が悪いみたいな空気になるだろ。

「い、良いツッコミだ。俺はその才能を見抜いてボケたんだよ。…

…ホントだよ？」

ウソだ。超うるたえてるし。

そんなやり取りをしていると、いつの間にか周りには人が集まっていた。

「やれやれー。もっとやれー」

「いつけえー、カベー！ ハイキックだー！」

「それも受け止める、バカコンビー！」

おお、皆にウケてる。

……父さん、母さん。俺、この学校でうまくやっていけそうだよ。

「任せろ！ 必殺！ カベキーーック！」

こうして俺はアイツらと仲良くなり、クラスに馴染んでいった。

あ後は担任が現れて仲間に入ってきたり、その妹さんが来て、その人があり得ないくらい可愛かったり、担任が妹にデレデレだったりと、俺の高校生活初日はなかなか面白かったものだった。

「おい、カベ。なんか柳と苗木さんがテストの点数で勝負してるぞ」
不意に友達から声を掛けられる。

「マジで？ だったらさ、どっちが勝つか賭けようぜ？」

ふふふ。「炸裂のバカ」こと柳海バーサス「澁刺のバカ」こと苗木愛美か。良い勝負になりそうだ。

俺と友達は、勝負が繰り広げられているカイの机に向かった。俺達に続き、十人ほどギャラリが集まる。

「俺は柳に百円」

友達が言った。

いや、カいは勝てないだろ、多分。

「俺は苗木さんに百円だ」

俺も勝者の予想を言った。

「せーの」

二人のテストが同時に机の上に並べられる。

「どっちだ？」

「どっち？」

そして、二人同時に、近くに居た俺に訊いてくる。

やれやれ、この程度の暗算もできねえのか。仕方ない。やってやるか。

計算を終え、俺は教室中に響き渡るように高らかに告げる。

「この世紀のバカ同士の対決の勝者は……!!」

破天こーメイツ外伝5 私は誰でしょう？（後書き）

推理、当たりましたか？

「なかなかブツ飛んだものだった。」までに正体を見破ったあなた。

素晴らしいです。エクセレントです。脇役を愛するその姿勢、そして鋭い洞察力。最高です。

最後まで読んでわかったあなた。

大丈夫です。普通わかる訳ないです。こんな脇役を覚えていてくださったあなたも凄いですよ。

最後まで読んでもわからなかったあなた。

まあ、普通ですよ。一時限目に出ている人です。大丈夫ですよ。あなたが普通です。

本編を読んでいないのでわからなかったあなた。

読んでください、お願いします。でもまあ、本編を読んでいなくても、一応読める作品にはなっていたはず。なっていましたよね？

外伝は本編を読んだ方が楽しめるというのは、他の話と同じですから、問題ないですよ。

ちなみにこのキャラ、私のいつ書いたかわからない設定に「小野政成 放送部 あだ名『カベ』と『レフリー』」と書いていました。

放送部の小野って、一回だけ出てきているんですよ。
ここまでわかったあなた。

神ですか？

長くなつてしまいました。ここまでお付き合いくださり、ありがとうございました。少しでもお楽しみいただけたならば幸いです。では、また。

破天こーメイツ外伝6 ガチンコ料理対決(前書き)

今回は愛美が主人公です。特にどうでもいい話です。

破天こーメイツ外伝6 ガチンコ料理対決

「突然ですが、『第二回 三バ会議』を始めようと思えますっ。はい、拍手っ」

私の声に続き、やる気のない拍手が二人の手から鳴らされる。二人とも乗り気じゃないみたい……。

今、私達は書道部の部室、その隅を陣取って、三人で会議を開いているのだ。

メンバーは、一年六組の「神力のバカ」と謳われる、坂上龍次郎それから一年四組の「炸裂のバカ」こと柳海。それと、同じく一年四組の私、「澆刺のバカ」と呼ばれている苗木愛美の三人。男の子二人はやる気が無いので、今回の司会は私がやることになっている。

「で、議題は？」

カイが眠そうな目を向けて私に訊いてくる。

「それはもちろん、定期試験の反省ですっ」

「俺達は力を尽くして頑張った。あとは才能の問題だ。以上。閉会っ！」

「はいストップ。私達はともかく、カイは頑張っていないよねっ？」

私が答えると同時の素早いボケに、私も負けずにツッコミを返す。

「何言ってるんだ。俺がこの中では点数が一番高いんだ。それはもう、努力あつてのものだろうが」

それは絶対違うと思う。

「ほう。平均睡眠時間、約四時間で毎日欠かさず活動時間の大半を勉強に費やしているこの……」

「だーっ！ 悪かった。龍次郎、俺が悪かったから……。はい、確かに私は全く努力していませんでした！」

もうっ、すぐこの二人は騒ぎだすんだから。

「……けど、マナよりは努力を……」

失敬な！

「私だつて頑張つたよつ。中学の時に越えられなかつた十点の壁を、ついに超越したんだからつ。それも苦手な数学で！」

決め手は勘で選んだ四択問題だったけど。アレのおかげで三点ゲツトして十二点だったんだのは内緒つ。でも、他の九点は努力あつてのものだから、問題ないはず。

「くそうつ！ なぜ勉強時間と点数が比例しないんだ……！ 不公平じゃないか、カイ」

龍くんが悔しそうに呻く。ちなみにカイは努力どころか授業すらマジメに受けていない。

「そう言うなよ。俺だつて努力した時期があつたんだ。でも全然理解できなかつたから諦めただけだ……つていうか、なぜか点数が全教科十点くらい下がつた。そして勉強しなくなつた途端元に戻つた。だから俺はもう勉強なんてしないのさ！」

カイの中学の友達曰く、その時のテストは特別難しかったらしいけど……。

「そうか、ならば仕方ないな。きっとカイの場合はやる気が空回りしてしまつんだな。今のやる気ないスタイルがベストということか」

「そうそう。……てことは、我々は今回の試験で最善を尽くしたということで、反省点無しで会議終了つてことだな！」

あ、司会の許可なく会議が終わつた……。

「じゃ、昼食を頂こうか」

そう、今日はなぜか午前授業だったので、昼から部活だったんだ。放課後すぐに会議を始めたから、おなか減つたなあ。

私達はそれぞれカバンから昼食を取りだす。

「む？ 二人とも一人暮らしじゃなかつたか？」

龍くんがコンビニの袋を引っ張り出しながら、私達の方を見て尋ねてきた。

「そうだよつ」

「そうだが？」

私達は同時に答える。なんで急にそんなことを訊いて来たんだろう。

「まさか、自炊をしているのか……!?」

それを聞いて、私はカイの、カイは私の手元をそれぞれ見る。そこには手作りと思しき弁当があった。

「料理くらいするさ。安く済む分、遊びに金を回せるからな」

即答するカイ。私もそれに続いて答える。

「私はそこそこ得意だからっ」

「ホントだ。結構うまいな」

「カイっ！ 勝手に食べないでっ」

二つしかないミニハンバーグを一つ食べられた。

「龍次郎も食ってみ？」

「む。なかなかの腕だ」

そして、残った一つも食べられた。

「おいおい、そんなこの世の終わりみたいな顔すんなって……」

……楽しみにしてたのに……。

「お詫びにこのポテトチップスを一枚進呈しよう」

龍くんが私にポテチを一枚、そっと差し出してきた。

「隙ありっ！」

私はカイの視線がそのポテチに注がれている隙に、カイのお弁当箱からコロツケを奪取し、口に頬り込む。……こ、これはっ！

「……おいしいっ。何これ、冷めてるのに凄いいいしい」

「そうか？」

「む。本当だな」

「龍次郎デメエ！ 俺のたった二つしかないコロツケの最後をお！」

「む。すまない。お詫びにこれを……」

「いらねえよ！ てか足りねえよ！」

静かな書道部の部室に私達の声が響く。

「あの、三人とも。もうちよつと静かに……あら、今お昼？」

「そうだよっ。三バ会議を開いてたから」

トコトコと注意しに来た書道部の部長代理、二年二組の彩那ちゃん是我的答えに首を傾げている。三バ会議が何か分からないんだね、

きつと。

「三八会議つてのは、一年で最もバカな三人、つまりは俺達が開く公式な雑談の会のことだ」

ま、だいたいカイの説明通りな感じ。

「それより、カイの手作り弁当がおいしんだよつ。彩那ちゃんも食べてみない？ もうコロッケは無いけど」

私がそう提案すると、彩那ちゃんは顔を赤らめてモジモジしながら言った。

「え……！？ カイ君の手料理……？ い、いただいても良いの……？」

「まあ別にいいよ。唯一の楽しみ、コロッケは全部食われたし」

「じゃあ、その……いただきます」

彩那ちゃんはヒョイと卵焼きを手でつかみ、ハンカチで手を拭きながらモグモグと味わう。

「本当に、とつてもおいしい……。これ、ローズマリーとチーズが入っているのね」

「ああ、洋風にしてみた」

「どしら」

「テメエはさつきコロッケを食つただろうが！ バカ龍次郎」

注意に来たはずの彩那ちゃんを加えて、私達の会話はさらに盛り上がる。

「私のもおいしいよ、彩那ちゃん。食べて食べてっ」

「そう？ じゃあ、いただくね？」

可愛く口を動かす彩那ちゃんを見ている私と、自分のお弁当が色々食べられる前に食を進めているカイに向かって、龍くんがポツリと呟いた。

「ふむ。どちらの料理が上なのか……」

その言葉を聞いた瞬間、穏やかだった空間に突如、電撃が走った。「カイも上手だけど、それはもちろん私だよ。仮にも女の子だよ

っ？」

「バカめ。コックは男の方が多いんだぜ？ 性別なんて関係ねえよ。無論、俺のが上だ」

「え〜と、好みとかがあるから、どっちが上とか、そういうのは…」

「…」

「……………」

！？

なんかいる！？ ……あ、なんだ。英徳っちか。

「……………ならば、勝負してみればいい。無論、この俺も参加しよう…」

「…」

「なぜ！？」

「話は聞かせてもらったわ！ その勝負、このアタシも乗ったあ！」

あ、はるちゃんだ。

「だからなぜ！？」

「カイ、バカはボケだけで良いの。なぜならツツコミは常識人がするから！ このアタシのようなね！ そんな訳で勝負は次の土曜日！ 基本的な食材はアタシが用意するから、特殊なモノを使うのみ、それを持参で！」

なんかよくわからない展開で、私達の勝利対決が始まるうとしていた。

『さあやって参りましたあ！ 書道部所属のトップバカ達による、料理対決う！ 司会進行はこの私、放送部の小野が務めさせていただきます！ では、選手の入場です』

「なんでこんな大事になってんだあ！」

アナウンスと同時にツツコミを入れるカイ。

今私達がいるのは、管弦楽部が使うコンサートホール。観客席には土曜日だというのに無数の生徒達がいて、ワーワーと騒ぎ立てている。

「ふふん、どうよ？ 『世紀の対決！ 書道部トップバカ料理ング・スペシャル！ 今夜、何かが起きる！』と、煽るだけ煽ってやったわ」

「すごい、流石はるちゃん。超満員だねっ」

「立ち見もいるくらいね！」

カイや英徳つちが嫌そうな顔をしているけど、はるちゃんはお構いなしみたい。

「あ、もちろん龍次郎も参加することになってるから」

「なにイツ！？ 料理、出来ないのだが……」

「気合いで何とかしなさい！」

もうやりたい放題だね、はるちゃん。さっすが私の尊敬する人っ。私達は次々と紹介されながら、キッチンが用意された舞台上がる。

『審査員は書道部顧問……と言いたいところですが、不在のため、長にお願いしましたあ！ 挨拶をお願いします』

審査員席に座る長に、マイクが渡される。

『よう、お前ら。今日は色々な意味で期待している。いいか、お前らはトップバカだ。そしてこの勝負の謳い文句には、何かが起こると……。ゆえに、普通の料理は減点！ 無論、不味くても減点！ 独創的なおいしい料理を作れ！ 以上だ』

『ありがとうございます！ それでは選手の皆さん、さっそくですが料理に取りかかってください。制限時間は一時間です。それでは……ファイッ！』

カンカンとゴングが鳴り、試合が開始される。

「独創的ね……。俺らにとっては言われるまでもねえことだろ」
遠くでカイが何か言ってる。

……つとと、私も頑張らないと……！
どんな料理にしようかなあ。そう言えば味覚って、甘い、塩辛い、酸っぱい、苦いの四種類だっけ？ ……よし、思いついた！

私はせつせと料理に取りかかる。この勝負、もらったよっ！

一時間が経過し、再びゴングが鳴り響く。おいしそうな匂いが立ちこめる中、私達は忙しく動かしていた手を止め指示を待つ。

うん、時間が無くて味見が出来なかったけど、きつと個性的な味になったんじゃないかな。

『それでは、審査タイム！ トップバターは、坂上龍次郎だあ！』
龍くんは皿を持って長のところに歩いて行く。

「どうぞ、ご賞味ください」

長に手渡された皿の上には、なにやら真っ黒な物体が乗っている。

「……何だ？ コレ」

「お焦げです」

「米が焦げてるだけじゃねえか！」

「……だから、お焦げです」

そつえば龍くん、料理できないって言ってたっけ。

『捨てるのはもったいないので、長は残さず食べましょう』

「マジか！？ くっ……死にはしないでらう」

長はパクリと口に炭を運ぶ。

「いや、これ食いもんじゃないだろ。ギブアップで。無論得点はゼロで」

龍くんはしょんぼりしながら元の場所に戻った。

「……次は俺だ。長、これを食べ……」

今度は英徳つちが皿をずいといと長に差し出す。

「おい英徳、何だこれ？」

「……さあな。冷蔵庫から適当に掴んだ食材を適当に切り、湯にぶち込んで煮ただけだ。分類するならば鍋か煮物だらう……」

ああ、あれが男らしいと思ってるんだ。自分から参加してきたのに、随分適当だね。

「……まあ、食べないことはないだろ」

長は箸で具を口に運び、モグモグ食べる。

「マズっ！ お前、出汁も取ってないどころか、味付けすらしてねえだろコレ！」

「……キサマともあるう者が情けない。漢なら小さいことは気にするな……！」

「いや、料理の評価だろ！？ 細かく言うのは当然だろうが！

…英徳の得点は三点！ 一応食えるものが出てきたからな」

英徳たちは不満そうな顔で戻っていく。

「じゃ、次はアタシね！ どぞ召し上がれえ！」

コトリと置かれた皿の中には、キラキラと餃子が輝いている。

「なんだ、遥にしては普通だな。てつきり泥団子とかが出てくるかと……ん？ そして普通にうまいじゃないか」

「……チツ、当たりを引いたか……。長、もう一ついかが？」

当たり？ 当たりって何だろ？

「おう……って、何だコレ！？ 中に泥が入ってるじゃねえか！」「わゝ、逃げるゝ」

はるちゃん楽しそうに全力疾走して会場から逃げて言った。

「待ちやがれ！ ……くっ、逃げ足の速い……。遥は棄権したようなので、無得点とする！」

次はいよいよ私の番だ。

私はお皿を手に、長の前まで歩いて行く。そして、なんかもう疲れた顔の長に温かいスープを差し出す。

「お？ なんだ、意外と見た目は綺麗じゃないか」

当たり前だよ。料理は得意だもん。

「じゃ、いただくか」

スプーンで汁を掬い、口に運ぶ長。とろみのあるスープはスルスルと喉の奥に消えていく。

「ブハツツ！ ゴホツ、ゴホツ！ おいコラ、テメエ何だこれはア！」

長はスープを吹き出して私に尋ねる。汚ないし失礼だよ。

「なにつて、味覚の全てを味わえるようにした、究極のスープだよつ。八チミツとエスプレッソコーヒーをよく混ぜ合わせてチリペツパーをたっぷり加えて。それから酢と塩をドバツと。野菜を煮てあるお湯にそれを入れて、また少し煮込んで完成した愛情たっぷりの……」

「お前はバカか!？」

その通りっ!

「くっ……独創的にと言ったばかりに、マシな料理が出てこねえ……」

……! 苗木愛美、マイナス三十点!」

「えっっ! 頑張ったのにいっ」

ていうか、マイナスって酷くない? どんな味かわからないけど、龍くんの炭よりまともじゃないの?

私が出ると同時に、カイが長の前に歩み出る。カイが長に差し出したお皿には、陶器の蓋が乗っている。

「あゝ、なんかやりにくいな」

「俺は今、猛烈に帰りたいたんだが……。どうせお前も訳のわからん……」

「まあ、蓋を取ってみて?」

皆が見守る中、長が蓋を開ける。

『おおーっ!』

観客席から歓声が聞こえてきた。長も中身を見るなり目を丸くしている。

「どんな料理なんだろ?」

私は近くに行つて、皿を覗き込んだ。

「……カイ、空気読もうよ……」

「……すまん……」

そこには、まるで宝石のように美しい和菓子が収まっていた。

「……あゝ、これは飯としても菓子としても食せるように、野菜や米で作っている。味も食事の邪魔にならない程度に甘い感じだ。え……一人だけマジメにやって恥ずかしいだろコラア!」

「そんなことは無いぞ、カイ！俺は今、素直に感動している！
ありがとう。本当にありがとう！そうだ、独創性のあるって言う
のはこういうもののことだったんだ」
涙を流しながら、長は和菓子を頬張る。そしてそのまま幸せそう
な表情を浮かべた。

「優勝は、三千点で柳海だあ！みんな、拍手っ！」

「……こんなんで勝つても、あんまり嬉しくねえな……」

会場は微妙な空気つつまれながらも、一応パチパチと拍手は鳴り
響いた。

料理対決は終了し、私達は控室に居た。

「……カイ、やるな。だが次は負けんぞ……」

「これで勝ったと思わないでよね！」

「いや、君の圧勝だったと思うぞ。遥はバカだから気にしないよう
に」

書道部トップバカの皆が楽しそうに話している。

「俺は本気のお前らと戦いたかった……って、よく考えるとさ、英
徳と龍次郎はマジメだったんだよな」

カイの声に頷く二人。そんなこと言うと、まるで私達が不真面目
だったみたいに聞こえるよ。

「私もマジメだったよっ」

私が主張すると、はるちゃんもそれに乗ってきた。

「アタシもアタシも」

「お前だけは絶対マジメじゃないからな!？」

一瞬で帰ってくるカイのツツ「ミ」。

「そういえば、優勝賞品つてなにももらったの？」

カイの言葉を見殺して、はるちゃんが尋ねる。

あ、そういえば感激した長から何か貰ってたっけ。

「ん？ ああ、アレか。あれは……最高級の……」
全員の視線がカイに集まる。あれほど感激していたんだから、賞品も凄いのかな。最高級って時点で、凄いものだと決まったようなものだ。

「……トイレットペーパーの芯」

こうして、最後まで微妙な空気での一日は終わりを迎えた。

「カイ。結局、カイと愛美はどっちが料理上手なんだ？」

「さあ？ ま、決められるものでもないだろうし、決めない方がいいものもあるさ。……そう言えばお前、勉強だけじゃなくて料理も苦手なんだな」

「レシピを覚えられないからな……」

破天こーメイツ外伝6 ガチンコ料理対決（後書き）

うーん、訳あって会話メインで話を進めましたが、それ故に状況がよくわからなかったり……しますよね。すみませんでした。

まあこの話は本当にどうでもいい話なので、どうでもいいんですよ。

えー……書くことないのでこの辺で失礼します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7774i/>

サイドストーリーズ ~それぞれの道~

2010年11月25日22時07分発行